

## Ⅰ 仏道の意味②

本願寺派布教使・行信教校講師 山本攝叡先生

我々の「<sup>ぶつどう</sup>仏道」は、「聞く」ということなのです。ただ単にふわっと聞くのではなく、命がけで聞いていく。それが本来の我々の仏道なのでしょう。

だから道元<sup>どうげんぜんじ</sup>禅師も「命を失っても悔いはない」と言って、当時の中国に渡って行かれます。そして向こうでいくつものお寺を訪ねていかれるのですが、なかなかこれというお師匠さんに出会うことができなかったのです。

何がいけないかという、たいていの大きなお寺を預かっていらっしゃる方というのは、政治や<sup>めいよ</sup>名誉ということと表裏一体なのです。やはり仏法が陥ってはならない一番いけない所は、<sup>りこ</sup>名誉や利己ということです。<sup>みょうり</sup>名利ということに陥ってしまうと、なかなか捨てることができないのです。私らが話させてもらっている時も、いい話や心に残る話をしようと考える。これは名利心なのです。この名利心は死ぬまでなくなるものではないです。

しかし、仏道と名利心とを秤にかけて、なるだけ名利心に負けないような方向で歩いていかなければならないというのが、道の意味なのでしょう。仏法ってこれで完成です、これで終わりですよってことは絶対ないです。死ぬまでないです。もう私は煩惱なくなりましたよってことも絶対ありえないですね。だから結局、名誉欲とか自我とか利己心とか、そういったものに負けないような歩みを歩いていくということに、道と呼ばれる意味があるのではないだろうかと思うのです。

道元禅師は、いろんな方に出会っていかれましたが、納得や満足のいくお師匠さんに会うことができませんでした。最後の最後で<sup>てんどうじ</sup>天童寺というお寺に帰ってきた時に、たまたまその天童寺の長についていらっしゃった方が<sup>にじょう</sup>如浄というお名前のお師匠さんでした。この方は本物だったのです。とにかく座禅ということについては、早朝から夜の10時や11時までで座って、わずか2～3時間眠って、また早朝から座ってと、非常に厳しい指導をなさった方なのです。

天童寺というのは、<sup>シャンハイ</sup>上海から少し南の<sup>ニンポー</sup>寧波にあるお寺なのですが、道元禅師は中国に着いて一番初めにその天童寺へ行かれました。でもその頃の天童寺は名誉心が渦巻いているような、あまり満足できる状態ではありませんでした。長い旅から帰ってきて、天童寺を再び訪れた時、如浄さんが長になっていらっしゃって、お寺の雰囲気<sup>ふんぎ</sup>が毅然と変わっていたのです。

この如浄さんに出会われ、道元禅師はこの方に付いていこうと思ひ、様々なことを尋ねながら修行をされました。如浄さんは非常に厳しいお師匠さんだったけれども優しい方で、法を説くということに関しては、<sup>ぼうい</sup>法衣を着ていても着ていなくても、どんな時でも問いがあったら来たらいいよと言って、可愛がってくださるのです。しかし考えたら、道元禅師が日本を出られてからわずか4年です。28歳の時に帰って来られるのですが、そんな僅かな年にどういう体験や経験をされたのかはわかりませんが、道元禅師はある1つの境地に達されるのです。

2021年3月1日「正宣寺春季彼岸会」より

YouTube「浄土真宗本願寺派 光寿山 正宣寺」チャンネルにて配信中